

The top's dream

常に、前へ前へ！ 過ぎてしまったことは悔やんでもしょうがない。

「自分が良いと思った物しか置かない」という高田弘氏は、創業130年の老舗家具屋の5代目。そのゆるぎない信念は、ただ、家具や雑貨を売っているのではなく、道具を通して豊かな暮らし方を提案したいという情熱に支えられている。仕入れる基準は「つくり手にしっかりとしたい思いがあるかどうか」「たとえ物が良くても、自分たちがふるいたつようなつくり手の思い、会社の姿勢があるかないかで違ってくる」と熱く語る。大切にしているのは、「美しくシンプルで永く使えるもの」。流行や機能性、効率だけを追求し、独自の思いを怠った無責任なおしきせの物づくりには、本気で腹を立てる。イメージは、「寒ければ家族が集まってコタツに入るような、自然と家族団らんが生まれてくるような家具」。広い店内にゆったりと配置されているソファやテーブル等の家具や雑貨は「一つひとつ形や色が違ってとても個性的。まるで、自分に合った使い手を持っているかのように静かに佇んでいる。触れたり座ったりしてみると、確かに、つくり手の温もりが伝わってくるようだ。決して安くはない。しかし「惚れ込んで買ってもらったら、大切にしてもらえない。修理をしながら愛着を持って長く使ってもらうことこそ嬉しい」と。これこそが、小さい頃から本物の家具を見て育ってきたからこそ、到達した思いではないだろうか。確かに、桐野屋のDNAが、きっちり受け継がれている。

創業当初は桐下駄つくりから始まり、やがて婚礼用桐箆筒の製造を100年ほど手がけてきた。30年前に、先代の父親が3000坪の今の土地を購入し、小さなショールームで小売をスタートさせ、つくる側から売る側にシフト。外商を中心に製造直売所として繁盛していたが、高田氏が継いだ頃から、世の中の風習も変化。もはや総桐箆筒の嫁入り道具の時代ではなく、大音量販売と競合するため、営業スタイルも変えざるをえなかった。まず、量を増やそうと、店舗を増築し家具をたくさん並べた。以前から北欧スタイルが好きで、良い物を入れてはいたものの、ただ並べただけでは、オープン当初賑わっただけで、そう簡単に売れるものではなかった。パリエーションで量販店に負けていた。「感覚を磨かなければ」と全国のインテリアショップを巡り、ちよとした気つきを積み重ね、これはと思うものを取り入れては失敗を繰り返していた。ある日、たまたまインテリア雑誌で見たかいた商品にビビツときて、すぐに北海道の現地に赴く。それは、北の住まい設計社がこだわってつくった、使っていくうちにその美しさを増していく無垢材の家具だった。そして、「これでいくんだー」と決意。それでも、最初のテーブルが売れるのに2年かかったそう。 「家具だけでなくダメ、家だけ良くてダメ。ヨーロッパの古い町並みがいやらしい」と。



日常こそが大切

「家を継げとは一度も言われていなかった」というが、大学卒業と同時に就職したのは東京の大手家具店。そこで多くのことを学ぶ。「良い意味でも悪い意味でも、さまざまな家具に接した。家具の不具合、配送やスタッフ対応へのクレーム処理など販売の裏側もたっぷり見て、物を売るとはどういうことかを知った。伝説的な人との巡り会い、人と人の付き合いも本音でしてきた。帰るつもりもなく、そこでの上がるうと思っていたと。ところが、父親が病で倒れ、心構えもなく慌しく帰郷。

さらに「日本は、見た目は豊かそうに見えても、本当の意味では豊かではない。お金がなくても「ヨ」して暮らしている国もある。大好きな日本にそれが残念」と嘆く。だからこそ、かつては自分も経験したことのある、素朴でさやかな当たり前の日常の暮らしを大切にしたいと、今、家具を通じてメッセージをおくっているのだ。

自分はダメが原点

「他の道もあるかもしれないが、当たって砕けろで、あまり難しく考えない性格。極端に言えば自分を信じるしかない。」「いつも、自分はレベルが低くてダメだ、ダメだと思っていて、間違ったことの積み重ねをしている気もする。スタッフや妻に申し訳ない」と、強気の後ろに謙虚さが垣間見える。紆余曲折しながら少しでも成長しようとして、いろんなものを見たり聞いたりアクティブに動きまわる。「体力が衰える60歳になるまでには、一日一日を大切に、ひとつでも世の中の役に立ちたい」とも。

一方で「振り返るのが大嫌いだ。昨日よりも今日、明日のことが大切。過ぎてしまったことは悔やんでもしょうがない。常に前へ前へとプラス思考」が生きているスタンス。へこんだ時は、朝パツと起きるといような、日々の生活を当たり前にこなすことで乗り越える。

好きな言葉は「無知の知」。哲人ソクラテスの有名な言葉だが、自分自身が無知であることを知っている人間は、自分自身が無知であることを知らない人間より賢く、真の知への探求は、まず自分が無知であることを知ることから始まるという考え方。まさに高田氏の生き様だ。

取材日：平成25年4月10日

PROFILE

たかだ ひろし

高田 弘



1961年7月18日生まれ51歳。壬生町の桐箆筒つくりを営む老舗の長男として生まれる。壬生高校から駒澤大学経営学部を経て、(株)大塚家具に入社。3年後、家業を継ぐために帰郷、現職に就く。大・中学生の2人娘の良き父親で、5年間PTA会長を務めるなど、地域にも大きく貢献。剣道の有段者。さらに読売ジャイアンツの入団テストを受けるほどの野球好き。